

常設展 〈2024年4月－6月〉 作家・作品解説

展示室 2

**モノクローム ただひとつの色にのせて**

**Monochrome, on the only one color**

### **ルーチョ・フォンタナ**

1899年アルゼンチン、サンタ・フェ州ロサリオ生まれ。イタリア人の画家、彫刻家。1905年より、イタリア、ミラノに移住し、アカデミア・ブレラで彫刻を学びました。1935年にパリの抽象美術のグループ「アプストラクシオン・クレアシオン」に参加。1939年、第2次世界大戦勃発に際し、アルゼンチンのブエノス・アイレスに渡ります。1946年、同地で自身が設立したアカデミア・アルタミラの仲間や生徒たちと「白の宣言」を発表、既存の絵画や彫刻を超えた新しい美学を表明します。同年ミラノに帰還し、1947年に「空間主義」を宣言。1949年頃より「空間概念」と題された一連の絵画制作を開始します。1951年からはネオンなどを用いた実験的な作品を発表しました。「アルテ・ポーヴェラ（貧しい芸術）」をはじめ、戦後美術に大きな影響を与えました。1968年、イタリア、ヴァレーゼで死去。

#### **1 くわかんがいねん 空間概念**

全体が均一に赤く塗られた画面の上を、鋭利な刃物によって切り裂かれた3本の線が走っています。2次元の平面であるという絵画の建前が、裂け目によって露わにされたカンヴァスの物質性によって崩されています。フォンタナはこの「空間概念」のシリーズでカンヴァスの裏側の空間の存在を暗示し、2次元の絵画が3次元の空間へと繋がり、新たな存在へと変化していくことを示唆しました。

### **フランク・ステラ**

1936年、アメリカのマサチューセッツ州生まれ。フィリップス・アカデミーで絵画を学

び、1954年から58年にプリンストン大学で美術史を学びました。大学を卒業した直後の1958年にニューヨークに移り、抽象表現主義への反発からカンヴァスを平坦な黒いストライプの連続で埋めた「ブラックシリーズ」を発表し、絵画の構成要素を極限まで切り詰める「ミニマリズム」の先駆的な作家と目されています。1960年ごろから変形したカンヴァスを使用した作品を発表し、60年半ばからは多彩な色彩をともなった巨大な作品を制作し始めました。その後はコラージュ、レリーフのような立体の作品、巨大なパブリックアート、建築デザインに至るまで、多岐にわたるスタイルで作品を発表しています。ミニマリズムの第一人者と位置づけられながら、後期の作品では過剰な装飾性が見られるなど、ミニマリズムの枠に囚われず、絵画とは何かという問いから絵画の可能性を追求し続けています。2024年アメリカ、ニューヨークで死去。

## 2 ブラック・シリーズII

黒いストライプを平行に並べた「ブラック・ペインティング」のシリーズ（1958-60）でミニマル・アートの代表作家となったステラは、1967年に過去の作品の集大成として制作された版画集において、1959-60年に制作した「ブラック・ペインティング」にもとづき、本作「ブラック・シリーズII」を制作しました。いずれも画面の左側にイメージが寄せられているのが特徴的ですが、これは画面右側の余白を作品の一部に取り込むことを意図しています。またステラはリトクレヨンという画材を用いて、版画においても黒い縞の中に微妙な濃淡の変化を残しています。

## イヴ・クライン

1928年フランス、ニース生まれ。1944年から1946年にかけて、国立商船学校と東洋言語学校で学ぶ間、柔道場に通い、美術家アルマン・フェルナンデス（1928-2005）や作曲家クロード・パスカル（1921-2017）と知り合います。1948年に秘密結社・薔薇<sup>ばら</sup>十字会に入会。1952年に来日して柔道の総本山、講道館に通い、翌年当時のフランスでは最高段位だった柔道四段位を取得しました。1955年からモノクロームの絵画制作をはじめ、1957年から「青の時代」に入り、自ら使用する青を「インターナショナル・クライン・ブルー（IKB）」と命名し、非物質化・精神化された芸術の創造を目指します。そのほか、何もない画廊空間

を作品として提示する「空虚」展、人体に絵の具を塗って、その形や動きを写し取った「人体測定プリント」、ガスバーナーで火の痕跡を定着する「火の絵画」等、様々な作品を発表し、後の多くの美術家に影響を与えました。1962年、フランス、パリで死去。

### 3 海綿レリーフ (青) RE-42

「海綿レリーフ」と呼ばれるシリーズの一作で、クラインが命名し、特許を取得した「インターナショナル・クライン・ブルー (IKB)」が使われています。本作は正確な制作年がわかりませんが、クラインがモノクロームの作品についての着想を得たのは、1948年から1949年と言われており、「海綿レリーフ」のシリーズは1958年から1961年にかけて制作されました。同シリーズのタイトルに付けられている「RE」はフランス語でスポンジレリーフを意味する「Relief éponge」の頭文字から取られています。

## アントニ・タピエス

1923年スペイン、カタルーニャ州バルセロナ生まれ。1943年から46年までバルセロナ大学で法律を学んだ後、本格的に絵画の制作をはじめます。1952年に第26回ヴェネツィア・ビエンナーレに参加。アンフォルメルの代表的作家として国際的に評価されています。

タピエスの作品は、土や砂を混ぜた布切れを作品に導入したコラージュの時期、絵具の厚塗りや引っ掻き傷によるアンフォルメルの時期、鏡、シルク・ストッキング、家具の断片等によるアッサンブラージュの時期の3つに分けられます。彼は第2次世界大戦後のヨーロッパ抽象絵画の代表的な画家であると同時に、スペインの風土や歴史に根づいた画家ととらえられています。たとえば、土や砂はスペインの大地、彼の用いる絵の具の赤はスペインの血と結びつけられ、少年期に体験したスペイン内戦(1936-1939)の栄光と悲慘が反映されているといわれています。2012年、バルセロナで死去。

### 4 黒い空間

第2次世界大戦以降のタピエスは、大量の絵の具を用い、時には砂を絵具に混ぜるなどして、厚塗りの壁のような独特のマチエール(画面の肌合い)を作り出すに至りました。本作においても、重たい黒色の絵具が執拗に塗り重ねられ、見る者を拒絶するような強烈な負の

存在感を持った画面が生み出されています。タピエスの作品に込められているのは、人間の生の辛苦とも言うべき暗い感情であり、それはタピエスの幼少期におけるスペイン内戦の記憶とも関係していると考えられます。

## アド・ラインハート

1913年、ニューヨーク州バッファロー生まれ。1931年から35年までコロンビア大学で美術史家メイヤー・シャビロに事。さらにアメリカン・アーティスト・スクールなどで絵画を学びます。1937年、幾何学的抽象の芸術家集団「アメリカン・アブストラクト・アーティスト」(AAA)に加わりました。第二次世界大戦中の1944～1945年には、カメラマンとして従軍し、また批評家としても活動しています。戦後はニューヨークのブルックリン・カレッジなどで教壇に立つ一方、自由な筆の抽象画を描きます。

その後、筆触は次第に四角い色面の形を取るようになり、1950年代には、モノクローム(単色)のわずかな色彩の変化により画面を分割する禁欲的で格な作風に至ります。「芸術としての芸術」を横務し、国面から構図や形態、主題や意味などを排除した「黒の絵画」シリーズは、その頂点に位置しています。1966～1967年、ジューイッシュ美術館で回顧展が開催されました。1967年ニューヨークで死去。

## 5 <sup>むだい</sup>無題

ラインハートは、初期はキュビズム風の絵画や、ピート・モンドリアン(1872-1944)の影響を感じさせる幾何学的抽象画を描いていましたが、やがて文字を思わせる記号的な線で画面を埋め尽くす作風に移行します。そして1950年代にはいると、本作のようなわずかな色調変化によって画面を幾つかの矩形に分割するモノクロームの抽象画を描くようになります。当初は青や赤の作品も制作していましたが、やがて画面から黒以外の色彩を排除し、ラインハートの代名詞として知られる、極めて禁欲的な「黒の絵画」に到達します。

## バーネット・ニューマン

1905年、アメリカ、ニューヨーク生まれ。高校時代にアート・ステューデントズ・リーグで、絵を描きはじめ、ニューヨークのシティ・カレッジで哲学の学位を取得しながら、同リ

ーグで絵を描き続けました。そして1948年に、彼の作品のトレードマークとなるジップ（線条）とよばれる垂直の帯を描いた最初の作品を発表します。単純化された色彩を機断するジップは、まるで画面の外にも続いているようで、見る者に、絵画の周りの空間への意識を促しました。またその垂直性は、見る者自身の身体に宿る軸線についての感覚も目覚めさせたのです。ニューマンが試みたのは、見るだけではない、いわば、身体と精神で体験する絵画でした。抽象表現主義の代表的な作家とされていますが、マーク・ロスコ（1903-1970）やクリフォード・スタイル（1904-1980）といった、他の代表的な作家に見られる表現主的な筆触とは異なる明確な輪別線と平坦な色面は、ミニマル・アートの先駆けととらえることもできます。1970年、アメリカ、ニューヨークで死去。

## 6 カントIV

### 7 無題<sup>むだい</sup>

ニューマンの作品は、巨大なカンヴァス全体（オールオーバー）に単色の色面が均一に広がり、「ジップ」と呼ばれる色の帯が、その色面を垂直に仕切っているのが特徴的です。この帯によって、カンヴァスの外まで空間の無限の広がりを感じさせます。

《カントIV》は、ニューマンが唯一カラーで制作した版画シリーズである「カント」シリーズの1点です。カント（canto）とは、詩歌における編のことを意味するイタリア語。このシリーズは18点で構成されており、当館では本作のほかにもう1点、《カントX》を収蔵しています。

《無題》は作品中央の黒い「ジップ」が画面を2等分し、左右にそれよりも細かい黒いラインが走っています。

これらの作品は、油画とは異なり、画面の周囲に必ず余白が残ってしまうリトグラフによる小さな作品ですが、自己完結した、閉ざされた空間ではない無限の広がりを感じることができます。

### くわやま ただあき 桑山 忠明

1932年愛知県名古屋市生まれ。1956年東京藝術大学日本画科を卒業。1958年アメリカに渡り、以後ニューヨークを拠点に活動しました。1961年、グリーン画廊で最初の個展を

開催。ストライプ（縞模様）やモノクローム（単色）による絵画やコラージュなどを出品して、当時台頭しつつあったミニマル・アートの文脈で高く評価されるようになります。その後、色彩が平坦に塗られた禁欲的な画面を金属製の枠で分割した作品を発表。メタリック・ペイント、ベークライトといった素材を作品制作に使用するなど、実験的な様々なアプローチを試みました。桑山は自らの芸術を「ピュア・アート（純粹芸術）」と呼び、「観念も理想も哲学も理屈も意味も、画家の人間性さえも入っていない。ただアートがあるだけ」と語っています。2023年アメリカ、ニューヨークで死去。

## 8 むだい 無題

## 9 むだい 無題

自らの芸術を「ピュア・アート（純粹芸術）」と呼ぶ桑山の作品は、極度に単純で禁欲的な構造が特徴です。たとえば1965年の《無題》は、黒で縁取りされた強烈な赤の正方形を4つつなげただけの作品であり、1975年の《無題》は、シルバーのメタリック・ペイントで画面全体が塗り潰されています。それぞれの作品で十字形に見えるのは作品の枠と同じクロームの棒です。どちらの作品からも、絵の具の濃淡や作家の筆致が完璧に排除されています。

## リチャード・セラ

1939年アメリカ、カリフォルニア州サンフランシスコ生まれ。1957から61年までカリフォルニア大学バークレー校で学び、61から64年までイェール大学で美術を履修しました。セラは最初ゴムを用いた彫刻作品を制作していましたが、一時期鉄工所で働いた経験から、次第に鉛や鉄を素材とした立体作品を制作し始めます。鉛板をロール状に巻いて積み上げた作品を経て、60年代後半に、工業的な鉄板を壁にもたせ掛ける、あるいは数枚の鉄板を互いに支え合わせるといった独自の作風を確立し、ポスト・ミニマリズムの代表的な作家となります。公共空間に設置される巨大な彫刻作品は時に物議をかもし、パブリック・アートの転換点となった作家でもあります。素材のもつ本来の表情をあらわにするとともに、作品が置かれる環境や状況などの「場」そのものについて鋭く問いかけています。2024年アメリカ、ニューヨークで死去。

10 バッド・ウォーター

11 バック・トゥ・ブラック

12 ポビー・サンズに

13 マルコム X

14 ザ・モラル・マジョリティ・サックス

鉄や鉛の板を地面に埋め込んだり、何枚かの巨大な鉄板を相互にもたせかけたりした彫刻で知られるセラが、1981年に制作した5点の大きなリトグラフです。これらはリトグラフ用のアルミ板にリトクレヨン<sup>リトクレヨン</sup>を厚く塗り重ねて原版にしたもので、彼が彫刻の素材として用いる金属の素材感や力強さ、重量感が版画で表現されており、セラの彫刻がそのまま写し取られたような重厚な存在感が感じられます。

いがらし あきお  
五十嵐 彰雄

1938年福井県武生市<sup>たけふ</sup>（現在の福井県越前市）生まれ。1960年福井大学卒業。1964年第8回シェル美術賞展に出品。土岡秀太郎（1895-1979）の創立した「北美文化協会」に1966年より所属し、73年まで北美グループ展に参加。70年代を起点に、欧米のミニマル・アートやコンセプチュアル・アートに刺激を受けながら、紙に鉛筆のドローイングを繰り返し、画面を黒く覆いつくす作品を発表します。80年代以降、絵画的イリュージョンを排除するような「ホワイト・ペインティング」に取り組み、白い絵の具を塗り重ね、積層する筆致の痕跡を追求しました。2000年以降には画面をサンドペーパーで削り取り、露わになったキャンバス地を見せる「物質としての絵画」を展開しています。

しきめん（そう）  
15 色面（相）85-51

しきめん（そう）  
16 色面（相）85-53

五十嵐の作品は、カンヴァスや紙全体を塗りつぶしたり、時にはそれを削りとったりすることで、行為としての「描くこと」を問いつつ、「物質としての絵画」を模索しています。本作では、黒い画面に対して白い絵の具を塗り重ねていますが、まるで絵の具が五十嵐が運ぶ筆の動きそのものであり、それが幾重にも集積したかのような印象を受けます。このよう

な白い絵の具が積層していく一連のシリーズに《色面（相）》とタイトルがつけられているのは、五十嵐の色に対する意識を紐解くヒントになるのではないのでしょうか。

くさま やよい  
**草間 彌生**

1929年長野県松本市生まれ。京都市立美術工芸学校（現在の京都市立美術工芸高等学校）絵画科で日本画を学びました。1957年渡米し、翌年ニューヨークに移住。1959年のニューヨークでの初個展では、《Infinity Net》など5点の大型絵画を発表し、ドナルド・ジャッド（1928-1994）をはじめとする芸術家や批評家に高く評価されました。以降、男根をモチーフにした柔らかな彫刻をベッドやソファ、椅子などに隙間なく貼付けた作品の制作やハプニングへの参加など、幅広い創作活動を展開します。1973年に日本に帰国し、以後東京を拠点に、アート作品の制作だけでなく、小説の執筆や、ハイブランドとのコラボレーションに至るまで、旺盛に活動を続けています。草間のトレードマークとも言える水玉や網模様は幼少期からの病に基づく幻影でありながらも、時代に鋭く反応する感性と相まって時にミニマルに、時にポップに表情を変え、多くの人を魅了しています。

## 17 Interminable Net No.2

本作は、草間がニューヨークで発表した「ネット・ペインティング」と呼ばれるシリーズのひとつです。一見すると白色の絵ですが、近づくと細かな網目状の模様で画面が覆われているのがわかります。こうしたパターンの執拗な繰り返しは、草間の作品全体を通して見られる特徴です。そして、当時の（特にニューヨークの）アートシーンにおいては、本シリーズは大きな身振りを伴う抽象表現主義とは異なる方向性を示唆するものとして、その独自性が高く評価されました。

むらかみ ともはる  
**村上 友晴**

1938年福島県三春町生まれ。1961年東京藝術大学日本画科卒業。その後専攻科に進学するも、3ヶ月余りで退学し、「村上友康」を画号に日本画家として活動をはじめました。同時に油絵の制作も試みており、卒業後まもなく東京の中央画廊で開いた個展には、粉状の顔料をパレットナイフで画面に丹念に塗りつけて描いた、黒一色の作品を発表しています。

1964年のグッゲンハイム国際展に出品した際にアメリカ抽象表現主義の作品に衝撃をうけ、75年に画号を捨て、以後は村上友晴として油彩と版画による表現を追求しています。

村上のモノクロームは、画面に微妙な濃淡や筆触といった作者の手わざを残したものであり、それらが作品に奥行きと精神性を与えています。2023年、死去。

## 18 じゅうじかのみち 十字架の道

本作は黒と赤の二版を刷り重ねた石版画ですが、通常の花版画のように平版上で水と油の反発作用を利用するのではなく、石の表面を削って、そこにインクを詰めて刷る凹版の形態を取っています。それによって、微妙な濃淡の変化や画面の細やかな表情が見られるのが特徴です。

題名の「十字架の道」はキリストが処刑を宣告される場面から、エルサレムのゴルゴダの丘で磔はりつけになり、埋葬されるまでの受難の道程が、14場面に分けて教会の中に描かれる伝統的な形式に則っており、本作も1点ごとに赤と黒の配分が微妙に異なる14点で構成されています。